

方言資料としての『八丈の寝覚草』

川 嶋 秀 之

はじめに

『八丈の寝覚草』は、江戸時代も終わりの弘化五年（1848）に刊行された本である。

『国書総目録』には地誌として扱われているように、八丈島の地勢や風俗、伝説などを中心に記してあるが、八丈方言についても多くの記述がなされている。八丈方言の歴史を考える上で重要な資料の一つと思われるが、これまでは『八丈島の言語調査』（国立国語研究所編・昭25）で、書誌や内容紹介等の解題が行なわれ、また、「日本庶民生活資料集・第一巻」（三一書房・昭43）で翻字が行なわれた程度で、まだ言語の面からの検討は進んでいないようである。

先般、勉誠社文庫の一つとして、『八丈の寝覚草』の影印本が翻刻・索引と中田祝夫氏の解説を付して刊行された（勉誠社・昭60）。金山正好氏所蔵の、虫喰・破損等の少ない善本である。中田氏の解説は、作者や書誌・異本等について、かつての「八丈島の言語調査」に比べ、格段に詳しい記述がなされており、『八丈の寝覚草』を方言資料として活用する上で非常に有益である。しかし、ここでも記載された方言についての説明はなされていない。

本稿では、この勉誠社文庫本を底本として、『八丈の寝覚草』を言語の面から検討してみようと思う。が、その前に書名や作者などについて、中田氏の解説を参照しながら少し述べておく必要があろう。

1 書名について

題簽には、

八多化の寐覚草

とあり、内題には

耶多希濃禰沙免具佐

とある。中田氏はこれを「やたけのねざめぐさ」と読んでいるが、内題の万葉仮名風に書かれた「沙」は普通濁らずに用いられるものであり、「さ」と清音で読んだ方がよいのではなかろうか。序文には

八たけの寐さめ草

とあって、濁点はない。一応、「やたけのねさめぐさ」と読むことにする。

2. 作者について

内題には

雀窓主人識

とあり、序文には

鶴窓山人述

とあり、また、跋文には、

何を鶴窓帰山がいふ

とある。中田氏解説によれば、墓碑に山口鶴叟ともいい、俳号を雀窓賀雪とも称したようである。さまざまに称したようであるが、本名は五郎左衛門といい、伊豆国の生まれ、明治になって姓を名乗り山口五郎左衛門となった。『国書総目録』では鶴窓主人を採用している。以下にその略歴を中田氏解説を要約して示す。

文化二年（1805） 伊豆国（静岡県）田方郡伊豆長岡小坂に生まれる。

天保六年（1835） 父死す。毒殺されたという。

天保八年（1837） 父の仇を討つ。

天保九年（1838） 八丈島に流刑。

弘化五年（1848） 『八丈寢覚の寢覚草』刊行。

明治元年（1868） 赦免。

明治二年（1869） 郷里の小坂に帰着。

明治十年（1877） 病没。

八丈島での流刑生活は30年の長きに及んでおり、『八丈の寢覚草』は流刑後10年目に刊行された。

ところで、八丈島には大賀郷・三根・樫立・中之郷・末吉の五つの地区があり、それぞれ言葉が少しずつ違っている。大きく区分するとすれば、大賀郷・三根の坂下地区と樫立・中之郷・末吉の坂上地区の二つにくくられる。したがって、『八丈の寢覚草』を言語の面から見た場合、作者鶴窓山人がどの地区の預りとなったかが問題となる。中田氏解説の引く『八丈島流人銘々伝』によれば

天保十亥年九月（流罪年月）

明治元辰年十二月赦免

在島年数 三〇年

着島年齢 三五

寺社奉行・稲葉丹後守掛・戌九月入牢・

大賀郷預り（預り村名・吟味役氏名）

身分住所 水野出羽守領分・豆州君沢郡

小坂村百姓（日蓮宗）姓は山口

とあって、大賀郷預りであったことがわかる。島内での流人の生活はかなり自由であったと言われているので、他の地区にも行ったであろうが、大賀郷預りであるから生活の中心は大賀郷であり、一応大賀郷方言の資料と見てよいであろう。

3. 内容と構成など

版本・写本等については、中田氏解説及び『国書総目録』にゆずる。版本は弘化五年木版本しかなく、写本もそれを基としたものである。

本書は全二十四丁の小冊子で、地誌・産業・風俗・人情等について記し、言語に関しては、十二丁以降に多くの記述をさいている。その記述方法は、たとえば次の通りである。

扱世にいふ難波のあしもいせのはまをぎにて所々の風俗物の名も言葉づかひも
かわりたるハことわりなればこゝを笑ふにハあらずまづ田を「たばらといひ畑
を「しよといひ稲の事を「たぶといふ

すなわち、「AとBといふ」（Aは当時の共通理解語、Bは方言）という形式で書かれている。そのほかに、この書が独自の価値を有すると考えられる部分がある。それは、十八丁ウ以降に島言葉をほぼそのままに収録し、それに当時の共通理解語の解釈を付した「痴話文」と「夫婦の会話」があることである。

当時の方言文例をそのまま載せたものは、他の地方にもほとんどないだけに、量的には少ないとはいえ貴重なものといえよう。

以下に、『八丈の寝覚草』に見える方言を摘記し整理するが、まだ読み解けない部分もあり、すべてを尽くしているものではないことを断っておく。今回は音韻について報告する。

4. 音韻

八丈方言は母音の転訛・融合に特色のある方言である。以下に、まずその母音に関する現象を見てゆくが、必要に応じて現在の八丈方言や共通語などと比較する。なお、例文の上の点、及び例文の下の（ ）で囲んだ語は筆者が付したものである。また、例文の最後にある数字は勉強社文庫本の頁数と行数を示す。踊り字は仮名に改めた。

ア) オ段音とウ段音

- 稲の事を「たぶといふ」25-8
 - なでるたぶのおしき筆とめむぎのすくもあらあらかしく41-7
 - 伯父でも伯母でも差別なく「おちうばといひ」27-5
 - 「ねッこうば」「なッこうば」「てこうば」また「くすうばとよぶ事なり」28-3
 - はげたヲやうらハおかずに47-7
- (歯をゆっくりは動かさないで。よくしゃべるという意味。)

「たぶ」はルビの「田穂」を認め、その転と見ておく。「やうら」は「やおら」(歴史仮名遣いは「やをら」)の転であろう。いずれの例も、オ>ウの例と見られる。

イ) イ段音とエ段音

- 父を「てて」27-2
- ててや。おちうば38-6

ウ) アイ

- あした草を「あいたと云 葉を「あいたばといふ」18-5
- けふだいぶらの。めんかかりんのふごうに。38-7
- ここのもののけだいをやんで46-5

「あした葉」というのは植物の名、「けふだい」は兄弟、「けだい」は懈怠という漢語に由来するものである。『八丈の寝覚草』では以上の三例とも融合していないが、現在の八丈方言ではそれぞれ、[ɛ:taba] (あした葉)、[kjo:de:] (兄弟)、[kede:jami] (懈怠病み) と言い、母音が融合している。特に、「あいたば」の例は、「あした葉」から [ɛ:taba] になくなる中間の語形の実例として貴重なものといえる。

エ) アエ>エー

- おめへの。おとがの。しょうんて。39-3
- おめへの。かげぶちが。40-6
- おめへ、おじやってあがれ43-6

「おめへ」(お前)という一語だけであるが、融合してあらわれる。

オ) ウオ>オー

- 鰹節を「かとふぶし」26-1
- たちにおこうかとうぶしよ46-9

現在の八丈方言でも鰹は [kato:] というが、別に [katsuw:] という語形も見られる。

カ) ウイ>エー

- てねげへもここエおかちが46-7

。てねげ^ハあんにしよ

46- 7

キ) オウ>エー

。きね^ヘのやゆふしま

39- 1

。御船^もけへ^びこがたの浜から出るげな

47-11

カ)、キ)の例の「手拭」・「昨日」(歴史仮名遣いは「きのふ」)・「今日」(歴史仮名遣いは「けふ」)は、現在の三根地区では、それぞれ [teneqei]・[kinei]・[kei]と発音する。エイという連母音に関しては、三根地区と大賀郷地区で

三根：大賀郷

ei : e:

という対立がある(『八丈島の言語調査』国立国語研究所編昭25 129頁を参照)。『八丈の寝覚草』の「てねげへ」、「てねげエ」「きねへ」・「けへび」(「び」は「日」)の「へ」・「エ」という表記は、長音をあらわしていると見られ、これらの例は大賀郷地区の特徴をよく示しているといえよう。大賀郷地区では、約130年前にも今日と同じく長音で発音していたことが推察される。

ク) アワ>オー

。母^{はは}を「ほうと云

27- 2

haha>hawa>ho:の変化が考えられる。八丈方言では、[to:ra](俵)、[o:](粟)、[so:ru](触わる)など、アワはオーとしてあらわれるので、母の場合も hawa という段階を経て「ほう」となったのであろう。ちなみに国語史上では、元永本古今和歌集(元永三年・1120年書写)をはじめとして平安・鎌倉時代から「はわ」の形が見えている。

助詞の融合した例も見られる。「は」と「を」の融合した例ばかりで、「へ」は「ここエおかっちが」のように融合しないであられる。

ア) ~エ+「は」

。う^りやあによ^か

46- 3

。あ^りやあ^んせ^へ

46- 4

。こ^りや^アそれはおきずに

46- 6

イ) ~オ+「は」

。ひ^つて^ふあ^せへどな^ア

33- 6

。た^ろふ^ちどな^ア

40- 4

ウ) ~イ+「を」

。ひ^よッ^ふッ^{つけ}ろ

46- 5

。う^ぬめ^があ^によ^しよ^け

47- 1

◦ たぢにおこうかうぶしよいちれしめづりだい 46-9
トツミイラズ カツラブシヤ ニレシ ヒキダシテ

◦ たぢョはけずにおこ 47-4
トダナヤ タヂズニ ライタ

これらの助詞の融合現象は、現在の発音では [urja] (あれは)、[apo] (何を)、] ço] (火を) などと発音されており、以上あげた例も「う・り・や」などと一つ一つを割って発音したものではなく、拗音で発音されたものであろう(ただし、イ)の例は長音)。「ひょッ」や「たぢョ」など「ッ」や「ョ」を小字で書き添えているのは、拗音をあらわそうとした表記上の工夫とも見られるかもしれない。

八丈方言は現在でも母音の融合現象がさかんであるが、以上に見てきたように「八丈の寝覚草」にもその傾向はうかがわれる。その中で、アイの連母音のみが融合しないであられるのは、やはり注目すべきことであろう。

次に、子音について特徴的なものを見る。

ア) ラ行音のダ行音化

◦ 六男を「どくろ_ろう 27-9
ろくにん

◦ 島人は流人といふ事を「づ人といひ 30-11

この現象は八丈方言の特色として著名なものであるが、現在では次第に失われつつある。

イ) シとヒの交替

◦ 七男を「しつてふ 33-6
しちだんな
◦ ひつてふあせへどなァあぜおじやらない

「ひつてふあせへ」は

兄さまといふ事を「あせへとの」といふ。太郎あせへ、じょうあせへ、さぼうあせへなどいふ 28-9

という記述により、「しつてふあせへ」の転と考えられる。こうしたシとヒの交替は、現在の八丈方言にも見ることができる。

ウ) 有声子音の前の促音化

◦ あつでか。おじやるのふと 38-5
イカカララシヤ

◦ あつだんも。なりんのふンて 38-6
イカニモ テヘガキハ

◦ しつべたが。おちつってあられず。 39-5
ライドガ スハラス

◦ でやきながら。つ、ばしつて。わそから 40-5
ハナシナガラ ヲトワリナサツタカラ

この現象は、坂上地区の中之郷・檜立では現在も見られるが、坂下地区の大賀郷・三根では見られない。我々が昭和58年に行なった調査では、三根でわずかに、「およっで」(寝る)の尊敬語)という一語に見られただけであった(大島一郎編『八丈島方言に

おける言語変化—共通語化の側面を中心として—」昭62参照)。いったい、『八丈の寝覚草』に見られるこの現象は、大賀郷のものと認めてよいのか、それとも坂上地区の特色が粉れこんだものなのか問題となろう。これまで大賀郷方言として扱ってきたこの資料の資料性とも関連することである。

そこで、これまでの八丈島関係の古文献や方言採取資料を調べるうちに、『全国方言資料』第七巻（日本放送協会編昭56）に次のような例があった。同書によれば、収録日は1959年3月9日、八丈町大賀郷の自由会話である。

足入れの話

f…ムカシニワ アシイレテッテ ジューノモノー コシラッテ ヒッカッ
コッテ⁹⁾ コア…昔は 足入れ婚といって 重の物を 作って ひっかかえ
て ねえ

P 180

注9) [çjkkak:kodde]

fは沖山いちえ氏 1885年生

あいさつ

m₁ オー ホイジャ アガ トッダシテ アゲイタソァワ
ええ それでは わたしが 取り出して あげましょう。

P 191

m₁ オー ホイジャー コノ モーリノ アメフリン ナラバ アスッデ イ
キイダソァンテヨーイ

ええ それでは この 次の 雨降りに なったら 遊びに 行きますか
らね

P 193

m₁は菊池庄之助氏 1890年生

これを見れば、かつてこの現象は大賀郷でも行なわれていたことが推察され、『八丈の寝覚草』の例もそれを証するものとして重要度を増すであろう。有声子音の前の促音化の現象は、以前は全島規模で行なわれた現象であったが、現在では中之郷・檜立に残存していると考えられる。

次に、やや個別的ではあるが注目すべき例をいくつか示す。

ア). 促音挿入

。す^ッと^ッね^ッこめ

46-10

(「ねこめ」の促音挿入)

イ) 音節脱落

。か^ッと^ッう^ッぶ^ッし^ッよ^ッい^ッち^ッれ

46-9

(「一連」の「ん」脱落)

。はしつてわすんて。 40-1
(「おわす」の「お」脱落)

。とつつぶ。かつて。 38-3
(「一粒」の「ひ」脱落及び促音挿入)

。まん船が湊入だァ 47-11
(「今に」の「い」脱落及び「に」の撥音化)

最後に、地名について重要な情報を提供してくれる例があるので、それについて一言述べよう。現在、三根と末吉との間にある坂を「登竜峠」というが、それは表記の上で固定しているだけであって、実際の話し言葉では [noborju:to:ge] ととも [noborjo:to:ge] ととも [noburju:to:ge] ととも発音されている。これは、「登竜峠」という表記は新しいもので、もとの語形は別であったらしいことを思わせるのであるが、『八丈の寝覚草』には、

三根むらより末吉村へ坂路二里余、これをのぼり尾といふ 15-1
とあって、この地名の変化の跡をうかがわせてくれる。おそらく、音声記号で示すなら [noborio] > [noborjo:] > [noborju:] という過程を辿ったものと思われる（塩を [jo]、「木を」を [kjo] といい、io は jo となる）。

以上、『八丈の寝覚草』における言語的特徴を音韻を中心に見てきた。量的には多いとはいえないが、いくつか重要な現象も見られたと思う。この資料には、文法現象において、「べい」の使用などさらに注目される現象が見られるのだが、文法及びこの資料の総合的評価は後稿を期したい。

。付記

本稿は、昭和61年度都立大大学院『日本語学演習』（大島教授担当）で発表したものをもとに加筆、訂正したものである。